川越市立図書館
令和五年度　郷土資料解題講座

『多濃武の雁』抄読

その2

令和五年九月三十日(土)　川越市立中央図書館　視聴覚ホール

講師　山野　清二郎　先生（埼玉大学名誉教授）

本テキストは、国立国会図書館所蔵本をもとに作成。
『埼玉叢書　第2巻』により補完。
変体仮名は平仮名で表記。
異体字表記は、常用漢字に変換している箇所あり。

古跡

薬師堂旧地。本町　中程今海老屋といへるけんどん屋の所にあり、六七十年以前多賀町へ引たり、今常蓮寺薬師是也。

熊野堂旧地。本町　北側榎本彌左衛門屋敷脇当時青物屋の所に熊野堂とてわつか斗の古塚有、いつの頃より有し事哉。今は平陸となれり。

金山権現旧地。鍛冶町　古代平井治兵衛屋敷にあり。西側、今万屋の所、今は東側に勧請せしが、年暦不知。凡二百年程のよし。霊験あらたにして、鍛冶町、古代より火災を免れ、偏に権現の擁護なりと云伝へたり。毎年二月十五日、当所の鍛冶共、青銅を甚兵衛方へ持寄り赤飯などして、権現を祭る。是古代の遺風也。

庚申塚。鴫町　大工町突当り、北側今番屋の所に、小き塚有。其上に古木の榎有、世俗庚申塚と呼来れり。延宝の頃、いつとなく塚も平陸となり、近年は番屋を立る。石像(尊カ)社等は有しといふ説もあり。又塚斗なりしを庚申塚と呼来れり、榎は享保の頃まで有しが、古木故朽倒れたり。

蟻塚。猪鼻町　中程より少し鴫町の方にあり。往古来歴知れす、年久しきことにて今は知る人もなし。

東明寺大門旧地。北町　今東側門谷六郎兵衛屋敷分也。当時、間坂と云種屋の辺。但道はなし。公儀水帳にも道の分の由。

十念寺旧地。代官町今宮ノ下　東明寺大寺の時は此辺都て境内なり。其頃十念寺も此代官町に有、侍屋敷地割に付堺町へ引たり。

眞行寺旧地。改の内　往古此辺にありしといへとも所不詳。

妙昌寺旧地。多賀町　古来当所今湯屋の辺にありしが、一度寺衰微に及び、延宝の頃此地を売払ひ、境町にて其頃家中浅場孫兵衛と云者下屋敷を求て引移しと云。

行傳寺旧地。久保町の内　所は不詳。

高松院旧地。清水町　所は不詳、中古城中に引けたり。

鍋屋旧地。宮ノ下　今の広小路の處、大昔五ヶ村鍋屋先祖居住の地なる由、委しく鍋屋の所にあり。

大河内屋敷。裏宿の辺　今永田氏屋敷　大河内金兵衛殿此所に居住の由。

囚獄屋敷。鍛冶町　西側今名主四郎治屋敷、古よりいかなる子細にやかく云伝たり。鴫町鍛冶町の堺昔も此所に木戸有。鴫町よりの入口元は余程の坂也。いつとなく今平陸となる。

切支丹屋敷。中原町の辺、今高松氏屋敷の辺、寛永の頃伊豆守殿天草より切支丹類葉召連、此處に差置たり。依てかく云。

三間屋敷。中原町　今相生氏屋敷の辺古長屋辺迨凡二千坪程　三間大隅守と云、公儀御預り人居住の由、わけ有て伊豆守殿より高禄給はると云。其跡当御代迨有しか其後小屋敷に地割改。

松井屋敷。西町の裏今水村下屋敷　伊豆守殿家臣、松井五郎左衛門居屋敷也。来歴の事は始に記し爰に畧す。表通り北向、こけら葺三十間の長屋門、左右裏の三方は不残圍ひ、中にも東の方は、外通り、深さ一丈余りの、から堀、内方は高土手、其内に居宅縦横に建、東土手際に幅四間に、竪、南北七十二間の馬場を通し、桃柳の並木、依て桃の馬場とも柳の馬場ともいへり。馬場南の末に方五七間高三間斗の山を築き山の匂倍に松桜を植、山上に観音堂安坐せり、東向九尺四方。千手観音石佛。元禄の頃所替に付不残破壊し当時水村下屋敷となれり。余不残畠となり、只観音堂馬場築山の俤のみ残れり。観音堂は古来より此所に有しともいへり。

妖怪屋敷。大久保町角　豆州、濃州両代は化物屋敷と云伝て、明屋敷なり。当御代に至り、小屋敷二つに割り、当時笠原氏高橋氏屋敷四拾年以来各住居あれとも、子細なし。むかしは広原の眞中にて陰気妖怪もありしか。

長松院跡。坂下　元此所御鷹匠倉林助左衛門と云者、住居ありし所也。後広済寺末長松院といへる庵あり、是も子細ありて今はなし、余程の屋敷構にして内は畑也。当時広済寺境内に属す。

御鷹部屋跡。中原町　正徳の始、戸田山城守殿鷹部屋建し跡也、今古長屋入口。

元服跡。下松江　西側久保町突当り、昔大河内金兵衛殿わけ有て此所にて前髪有しと云。今に方五六尺斗の地きよめの場といひ伝へたり。

時の鐘常蓮寺境内

銘曰、武州入間郡河越城下

時鳴鐘損壊於レ是当　時城主侍従源信綱命二冶工一新鑄レ之者也

承應二歳癸巳正月吉辰

冶工　椎名兵庫鑄之

右は承應年中、伊豆守殿鑄させられし鐘也。此所に掛け来りけれとも、形小く、音ひくきか故、当時はづして今会所にあり。

当時の鐘

銘曰。元禄七甲戌季七月吉日

鑄物師谷村住　沼上七郎左衛門正次

河野七郎左衛門良正

甲州谷村の城下、時の鐘なりしを、所替の節此方へ持せ来り給へり。音色たくひなく風気に依ては六七里か程にても近所の鐘の如し。誠に黄渉調にて長久の音といふ。谷村所替の節貫目重き故其儘差置れへきに極りしに、不思議や龍頭の折鉄延て鐘下へ落たり。鍛て掛けしに又鐘樓より落たり。再三に及ひしかば、然らば持せ参るへきにして持来りしに、貫目軽くしてやすゝと当所へ来る。凡世俗に申伝へたる鐘の奇成へし諸人皆知る所也。此多賀町は川越の中央、四方への釣合甲乙なし。殊に鐘撞堂薬師寺門を兼たり。十二神のよる所なきにしもあらずとて此所に掛おく。此地常蓮寺境内なりしを、南町入口北角にて代地給はる。代々城主修覆也。近年鐘突の居宅は自分普請也享保十八鐘樓の上に標を(火見櫓を)新規に建次たりしか近年は破壊して今は相止たり。田畑三反鐘突料として古来より附地あり。其外町中一ヶ月の払銭、是鐘突二人の給金也。

首塚。下町　今東側桧物屋の裏にあり。塚はなし。天文の乱北條と両上杉合戦ありし時、討死の首を一つ塚に築きたるといへり。宝永の頃此塚を崩しけるに、髑髏三四百斗も掘出したり。遠き事にあらず。東明寺口の戦、討死多しと旧記にあれは、誠に古戦場に疑なき事也。今も此所の土を穿みれば白骨出る由、尤此所も東明寺境内也。

東明寺橋又田屋橋とも。いにしへより有し橋也。爰も東明寺の領なり。此橋は巽乾に聳へ、西大手総門へ正面のよし。東明寺口と旧記に有るは此處の事也。

東明寺堤。東明寺橋より西方町家の裏通　此所土地低く度々の洪水に川水あふれけれは伊豆守殿時代土手を築かれ近年もまた修覆あり。

東明寺坂。北町より下町への通り　古代余程の坂有りしが今平陸と成。

枝垂桜。行傳寺境内　本堂の前に有て、すくれて大木也。花盛には枝を交へ、其梢地に付斗、花の形極めて大きく爛熳の時は、遊覧の人多し。凡東武迫も名高き名木なりしが、享保の頃、風雨のために倒たり。其跡に若木の桜を植つき、其名をのこす。

妻死田。妙昌寺境内　元熟田にて五畝の年貢地也。此田を作るもの必す其妻を病死せり。後は田作するものなく、荒地となりて、俗に妻殺田といふ。伊豆守差図にて、中古芹を植られしに依て芹田ともいふ。寛保の始諸人の他力を以て、彼田を一ッの嶋に取立て、弁天社を創立す。当地は田面を見卸し冨士秩父の遠山眼前の美景也。

隠居田。清水御門外　来歴不知。

鳥居田。清水御門外　杉下村の辺　さいつ頃洪水に仙波弁天の鳥居流来り、此所にとゝまりたり。それよりの名と云。

鍋屋五ヶ村。元祖四郎右衛門は足立郡川口村の者にて、矢澤四郎右衛門と云。代々の者にて、当四郎右衛門まで四代なり。凡百六七十年以前と云なり。代官町今宮ノ下広小路の處に住居せしを、其頃御用地に成り、代地野田下に於て給はり今以其所を鍋新田といふ。又此處も御用にて今鷹部屋の處へ引越、是又間もなく公儀御鳥屋御用に付今の地に引移り、凡百十余年に及ひしと云。

辷り淵。赤間川向　昔は人里遠く強賊此所に俳徊し狼藉切取して、此淵へ沈しとかや。依之淵へはまる心にて誰となく辷り淵と呼ならはせり。

牛小橋。清水町入口構堀の石橋　星野山僧正尊海牛車に経巻を積み、此牛の止る所、霊境の古跡なりとありしに、此處に至り牛すゝますして、蹉しとなり。依て牛小橋といふ。委く星野山縁起に有。

御茶水。清水町今長山氏屋敷内　或儒者此水を称美して云、正しく京都の柳の水と同じ也。伊豆守殿則柳水を取寄、両匁を掛けて見玉ふに、分厘軽重たかふ事なし。依之類なき名水なりとて、新に清潔の志水の側に井を掘、井桁となして城主代々御茶水に奔走す。

浮島。仙波下　此所一茂りの森にして三方は田面前に細き道あり。此地浮しま也五月雨の降つつきにも此森の芝草隠れて常にひた〳〵水也其内に稲荷社有。

都島。浮島の辺　これも浮島のことき漂泊する島なるへし。いつれの所か不詳。

尾崎台。仙波下　余名川の方より見れば南は仙波続き遙の台也、往古神龍住て其頭は仙波星野山に至り、尾は此處にありしといふ俗言説あり。

樹木屋敷。宮ノ下蔵町突当り四千四百八坪。東西七十六間。南北五十八間、酒井河内守殿、当城領地の節、三州雪峯山龍海院曹洞宗二百石を移され、菩提所とす。慶長六年、所替に付今廐橋にあり。同備後守殿居城の節、又菩提所建立有。南陽山源昌寺曹洞宗料二百石有之。今樹木屋敷役人の家居の辺、石塔石なとあるは、其頃の残りなるか、讃岐守殿、若州小濱所替の時、川越より一里半、乾、紺谷村へ引たり。其後寛永十六、伊豆守殿領地となり簗（いけす）を差置れあまた鯉鮒を放され、年々献覧もありしと。森下甚右衛門といふ者是を司り、簗屋敷と称す。其頃より段々、柿梨子の苗木、多く植たり。美濃守殿時代、生類制禁に付、簗も相止み、夫より樹木屋敷と一統に申。当御代に至り、益枝葉榮り。年々献覧も有とかや。

丸野馬場。宮ノ下二千百十六坪　伊豆守殿時代屋敷構の如くにして、内に馬場鉄砲場あり。その余は皆畑也。屋守の家一軒ありて、国友佐五右衛門先祖預りの場也。所替後宝永の頃、士峯山泰安寺を建る。

泰安寺。開山亮海僧正万治三戌八月廿三日、二世亮賢法印天和三亥十一月十五日、三世主純法印享

保十三申二月十二日、四世直梁法師享保十五戌十二月廿九日、五世義龍法印享保十七子七月三日、六世舜雄法印、七世舜慧(七世の文書入れ)。

余名川。仙波下　いつの頃やよねと云女身を投け此池の主と成たる由。依て與根川と云へかりしを中古あやまりてよな川と唱ひ来れり、此内に七ッ釜と云有。水草もはへかたき底しれぬ深き所七つあり。世俗に龍宮城迚つゝきし穴成と云其内に獅子頭なとゝ云て蝮住し由、昔より見たる者儘多し。今も霖雨又は白雨の頃なと草苅なと正に見たる由。

観音橋。清水御門東余名川の先　杉下村の道に有小き石橋なり。昔此所に観音堂ありし故の名なり。霊験ある作佛の由、今仙波に安座す。

見通しの松。杉下村田の中にあり　松郷分仙波分の境の印松なりともいへり。伊豆守殿時代挾間打鉄砲の目当の松ともいへり。

比丘尼茶原。三番町南側裏手　昔熊野派山伏の妻貞清といふ比丘尼の畑ありし故、其名有。

下水流。南町　古来より此辺の水吐にて、丹波屋と云者の脇より、養寿院長喜院の境内を境全く養寿院境内の眞中を、廟所の際より、御廐の所をさして、末は赤間川へ流れ落、大庭の小川程ありしか伊豆守殿時代養寿院境内の内用地に付て以来は、寺の後にて堀留られたり。

埃捨場(チリステバ)。南町　今穀屋次郎吉と云者屋敷也。昔は此所南町一町の塵芥捨(チリアクタ)所なりしを、元和の頃行傳寺当所へ引け草創の節迚は、今の大門入口の所、次郎吉先祖住居の屋敷なりしを、酒井讃岐守殿家老、田中又左衛門といふ仁、差図にて、此埃捨場の空地を彼屋敷と引替られし由、依而此大門先は南町分にて、除地にあらず、年貢地也。

御花畑(オハナバタケ)。鴫町　南側町屋の裏、今小屋敷の處、元御用地にて千草万花を植られし故花畠と云。其頃大工町の方に入口ありて、伊豆守殿時代、屋敷と成。大工町の方入口をふさぎ、鴫町の方に口を附、小屋敷二軒となる。

御鷹部屋。世俗に御鳥屋と云。此所五ヶ村分。伊豆守殿時代公儀御鷹部屋ありて御鷹匠鈴木三郎左衛門料二百石、御鳥見仲田助作料二百石居住せり御鷹も余程ありしが、元禄の頃生類御制禁に付其節より相止み、鈴木中田両士も江府へ帰られ、当御代に至り又鷹部屋建。

境榎。蓮馨寺前　竪門前と南門前の曲角に古木榎あり。昔此所まで武蔵野にて、其境の印の木なり。享保の頃、朽倒れたり。

堺石橋。松郷と竪門前境　是迚蓮馨寺分の堺也、近頃迚南の角に穴ありて古き札守など捨所今は町屋と也て其跡なし。

犬小屋跡。坂上　元禄の頃美濃守殿時代生類御憐の時分の犬小屋の跡也。今は此所に長屋有りて家持仲間なと住居す。

唯心庵。坂上庵りと云　美濃守殿家中三東小市郎(居屋敷八今堀内氏所)と云者下屋敷也。家作甚たくみにして築山泉水をかまへ向は田畑の眺望目をかきりにして誠に市中の閑居人間栄耀の地ともいふべし所替後唯心と云道心者しはらく住し故いつとなくかく云。所々釘隠に蔦の紋有是三東氏の紋所其後三東は武田安房と改てより武田菱を以定紋とす。

天神前。仙波新田　入口並木の所昔天神の社有今は宿の中程に幽斗のやしろ有。

元塩焔蔵。中原の末松江分　南北七十間余。東西五十間余。四方に松杉の大木有て大屋敷構のことし中に又南北一通りの杉並木。此構の角に二間五間の塩硝調合所番所有しか享保三戌年飛火にて類焼。同七寅年新宿村へ移す夫より新宿を新塩硝蔵と云、此所元塩硝蔵と云此節鉄砲場の四方斗残れり此余は不残代て畑となる。鉄砲場幅六間長七十間程。左右松杉の並木近頃まて垜眞中に有しか享保の始南の末に垜を築六十間余の稽古場也。

三ッ家御廐下。御鳥屋入口長六十間　是養寿院門前分也。御廐代地と云。鷹部屋の垣境ひ四千坪余有葛屋三軒有りし故かく云今以構の内は家居すくなく余は畑也。

尾崎台馬場。幅四間長七十五間、是も伊豆守殿時代出来余名川の道に習ひて馬場を通し東の末に垜有。

新屋西町。享保の頃新規に建。東側九軒西側七軒。其節西雲寺の脇通りに新道も出来たり。

杉林。鉦打町　元南片側小屋敷也。享保三回禄後屋敷跡不残杉苗植。今は大木となれり、北側は鉦打町也。

脇田村。高四百七十石余　八幡新田。西町通り大久保丁辺迄の惣名也。

的場。高沢町末　伊豆守殿時代より有し也。此脇に小屋敷一軒有。南は町屋を覆ひ北は大蓮寺の廟所也。

的場。南大手　丸馬出の外芝原、伊豆守殿鉄砲見分の場也。

的場。西町の末　組屋敷地割の節三百坪の所也。

阿彌陀堂前。清水町入口　昔阿彌陀堂の跡也、西雲と云道心者住て不怠念佛の地也、本尊は下品の彌陀。今は仙波の慈惠堂へ移し堂は西町へ引け今西雲寺是也世俗御光堂と云しと也。

妖怪

爺榎姥榎。大蓮寺の門脇古来の榎二株あり。世俗に爺姥榎といふ。享保年中二本共に伐りしに、此榎

倒るゝ時の風に当りし集る所の人、不レ残惣身に風斑（ほろし）の如き細かなるもの出来たり。いか様誰人の霊(印)の木にても有や。今寺僧に聞けば二本にてはなし一本なりと云。

久太郎狐。六軒町　昔此辺に人里稀にして野狐多く住みしか其内に久太郎狐と名を得たるあり。往来の人を時としてたぶらかし売物なとして年をへぬ。かくする内家居建込み其事もなくなりしとかや。遠き昔の沙汰、今は知る人も稀也。

嘘姥。広済寺境内　いつの頃や上州廐橋出生の何某と云浪人、北町に住せしに、或夜外より帰る時、彼浪人の跡より、何者とも知らず付け来る人の足音す。内へ入りて見れ共、何事もなく、不思議に思ひ燈し火をてらしみるに、一つの石あり。其夜は何となく片付、翌日見れば何とやら石塔なとの様なりければ、俗家に置事如何と思ひ当寺門内へ移しぬ。然るに誰となく咳嗽の煩に、此石を縄にてからげ置けば、病、平癒する事、奇なりとて、成就の時豆煎を手向る由、供養の心なるか、是まさしく上州の嘘神飛来給ふならんと専ら云伝のみにて、正説知る者なし。昔は門内左の方に有しか近年は右の方にあり。いふかしき事也。

感譽御影。蓮馨寺坊中の内　慶長の頃此近き辺に嫉妬深き女あり。或夜嗔恚のあまり当寺に忍入り、御影の右の頬に釘を打ち、其處を去らず、狂気となれり。又釘の底口より血流れし事誠に生たる人の如し。其後再興あれとも、終にいへす彼釘の疵跡、ほくろの如くにある由。

蟲食奴墓。法善寺　俗名瀬川嘉右衛門と云。生国上総の者にて、伊豆守殿家中石川作右衛門といふ者の鎗持なり。常々大酒にて、あらゆる生き物を喰ふ偏に人倫の業に離れ、生冷なる、禽獣腐肉もいとはず、酒だにあれば何にても好食せしなり。晩年に及び此所無縁の者なれば迚、存生の内我像を当寺に建置、程なく身まかりけりと也。法名は浄徳。元禄六癸酉歳正月十六日卒。意形の者たる故爰にあらわす。

遊佐地蔵。蓮馨寺境内石佛立像　伊豆守殿家中遊佐將監墓也。領六百石住居石川喜四郎屋敷、其身仁愛深く廟の印とて石佛の地蔵を建る。誠に心の徳、愛の理にて、自然と願ひ有者尊敬せば。其事成就せすと云事なし。此遊佐氏は寛永の頃伊豆守殿に仕官、先祖は奥州遊佐の城主にて由緒たゞしき者大力の勇士也。天草対陣の節もゆゝしき働あり。今に其子孫豆州の家に有。

赤間川螢。東明寺橋より高澤橋御茶屋下迠の辺　大きさ常の螢に倍す。群り飛ふ事高七八丈ばかり、偏に火焔の如く、或は数百塊りて、水上に落散り、又は螢柱なととて、数百集り寄る事竪る柱に等し。光、水の面に移り、見る人、目を驚かす。風雨なく、晴れたる夜は猶多し。毎年芒種の節より十日前後甚た盛なり。誠に闇を知らす、景色斜ならず。さりなから近年は当所繁華に従ひ、此辺も年々川払あ

りて、腐草稀にして今は昔の俤のみ残れり。

弁天社。南久保町今寺田氏屋敷　伊豆守殿家中浅井権右衛門住居、かのものの息女仙波弁天へ来りしに希有の事有依て屋敷の内に此社を創立す、委く仙波弁天緑起に有故爰に畧す。

安田深尾喧嘩の次第。寛永の頃伊豆守殿家中安田大助年三十九才居住大工町、今石川杢之助屋敷、深尾佐太郎年二十八才居住宮ノ下、今石川安兵衛屋敷、十一月十六日の事なりしに両人高澤的場に於て、掛的の上口論に及び、差置がたき意趣を含み、今宵赤間川辺り淵にて出逢へき由、佐太郎方へ申遣、大助は高澤橋の方より歩行、本應寺裏門先に待請。佐太郎は五箇村の方より、是も期したる出立、辺淵にて出合、互に詞をかわし、切結ひ双方はげしく戦勝負付さりけり。安田手疵十八ヶ所、深尾も手疵十一ヶ所、互にしばらく息つぎて、大助数ヶ所の疵なから兼て思ひ設けし事なれば踏込て佐太郎か頬先掛て切たをし、終に本意を遂けたり。然れとも大助左の股深手にて、中々進退、心の儘ならず、唯片息にて居たる處へ、其頃御鳥屋ありて御餌差殺生帰るさ、此体を見て子細を問へば、しかノ〳〵と語る。依て肩に引かけ、漸、本應寺脇まて退き、夫より寺中へたより、時に住僧安田が菩提所を尋けるに、漸く息の下より見立寺の由、答へぬ。則ち見立寺へ相渡す、早々安田一類掛付。切腹の望もあれば、急ぎ、従弟安田何某、介錯にて事済ぬ。辻惣大夫といふ者、検使を承りぬ。此大助は一眼にて、器量よき勇士なり伊豆守殿深くをしまれたりと云。当所古き者は存たる事なから、其次第あらましを記しおく。

〈寺院、仙波星野山之記は省略〉

近郷古跡

箕尾谷塚。三保谷村　四郎か出生の地也、此所に五輪山龍国寺真言と云有、其境内に四郎か塚とて幽成石塔有銘文も見へず年久敷事にてたしかならず。

大道寺塚。上戸村川越山常楽寺時宗と云に駿河守墓所とてあやしき石塔有。銘文も見へず、古しへ犬竹村に有しと云。假に廟所と云証もなければいふかしき事也。

治衛塚。浄蓮坊　城主伊豆守殿家中に吉田治衛正次と云者有、かれは生国江州の者にて始大坂方、森豊前守か手下に属し戦功有、落城以後は酒井山城守重隆雅楽頭忠世養子に仕官し重隆備州へ配流是よりして豆州の恩顧にあつかり川越に居住し齢七旬にして身まかる。此地は下屋敷成により寛永三第庭の松を植、髏骨を塚に築傍に幽成一寺を建る吉田山本明院天台高松院末

黒塚。大宮驛東光寺と云に其旧跡有、倩黒塚は紀州那智の光明坊宥慶、悪鬼退散の地也、奥州安達の黒塚山に鬼神住しと云は勢州鈴鹿山、丹州大江山の類ひにして皆強盗也、往日此所に厲女有て人民

を苦しむ。時の人是を恐奥州安達に対してかの住所を黒塚となんいへり、一森の内大樹七八本有りて塚の形はなし、当所の民さいつ比熊野まうでのみきり那智山にて由緒を尋けるに寺記を書こされける数通今に有、熊野の光明坊は熊野上綱の棟梁也天正の亂に系図散失してしかと其わけしれず。世に東光坊阿闍梨祐慶は当山の光明坊也。熊野の威光関東に輝と云心にや東光坊と云。此所に来り厲女を教化して佛道に入しむるを悪鬼退散とはいふなるへし、鬼は女の下畧にてかりにも鬼のすたくも也と云は、女の物語をよみし歌也傍に一寺を造立し東光寺と号。昔は天台の精舎也しか今は曹洞の霊場となれり、黒塚の旧跡も東光寺の地の傍にあつて則境内也

養竹院桜花。三保谷村寛永七申二月大樹家光公御鷹野折柄此寺に立よらせけるに折から庭前の糸桜爛熳たり

白糸をかけみたしたる三保谷の桜をけふのあかしとそみる　　御製

此御詠によりて桜に少しの領を附られたり

〈一部省略〉

日好月好屋舗。野田下。屋敷構にしてあやしき所あり其かたち斗残りてわつかに竹藪也昔日好大夫月好大夫と云遊君の住せし所と云伝へたり古代白拍子と云類ひなるへし。

堀兼井。七曲井。武蔵野堀金村　小高き所に浅間の社有。其桙左の方窪める所。是堀兼井の跡也。方一間斗の石を窠して井桁とし名所方角抄にも堀兼井は入間の近所と有。清少納言も井はほりかねとかゝれたり。

千載集　　武蔵野のほり兼の井も有ものを嬉し哉水に近付にけり　　俊成

碑銘高五尺六寸横二尺四寸　依城主喬知命建之

此凹形之地所謂堀兼之蹟也。恐久而遂失其處因以石井欄置坳中削碑而建其傍併以備後監

里語堀而難得レ水故云尓兼通レ難未レ知只従レ俗耳

宝永戊子年三月朔

此あたりに堀兼の井と称する所多し。此所は浅間堀兼といへり。此南五六丁が程にも井の跡とて有。いつれ本所とはみへかたし。すへて水を設くは低き所こそなれ。一段高き所井を掘事信用しかたし。又入曽と云里、堀兼より半里斗南の方也。此所に七曲り井と云有。是も堀兼といへり。すべて此辺土地高くして水を得かたし。依て井の廻りに小坂を付めぐり下りて水近く程よき所より汲事也。されば堀かねたると云理を以其名有との里語也。いみ深しといへともさのみ堀かねたるにあらず。堀金村の

名水なれば堀金の井と云に決せり。村の名は金の字、兼の字を書よりほりかねたると釈して書跡をまよはしたるもの也、入間郡に有川を入間川と云にひとし。下総の眞間の継橋も継たるはしにてはなし。眞間の橋成を継の字書たる故継はしと云堀兼も此類ひ也。

逃水。武蔵野内　広原の内に有て誠の水にあらず、莽[1]罠の草も若く生たち麗か成春の空に地気立てこなたよりみれば草の葉末しろ〳〵と水の流れることくにみゆる、其所に至りて見れば其影もなし、又向に流ることくのかげ有。いつく迮も其所をさためず。行程先へ逃行様成故かく名付たり。春より夏かけて有事也

東路に有りといふ成逃水のにけ隠れても世を過す哉　俊頼

志水。武蔵野ゝ内水野村　此所に流れ来る野水有。其水上は箱根崎より出てて当所の里民忠助か屋敷の裏竹藪の中になかれとまる清潔の志水也。いかなる事にや其源あれ共水しもなし。忠助元祖いふかしき事に思ひ或時おふくかの水に墨をなかしけるにいく程ありて新河岸村の弁天のみたらし墨水となれり。思ふに正敷水野の志水にてもあるらん、其間二里程野山を隔て此所にあらはれしは水道と云ふても有やいふかし。

梶原地。　池辺村　此所にわつか計りなる小池有。ひとゝせ頼朝奈須野御狩の帰るさに馬をひやしける所也とて水底に鞍一領池の主と成て有由。此池は梶原平蔵の領地のよし。

狭山池。熊谷驛より二里程西の方幡羅郡の内秩父道　見加尻と云所御領国と成て三宅惣右衛門康貞の領地也。此所に狭山か池と云有。其山はあらずや其所にちいさき山有。それこそ狭山成へしといへは、所の者は池の名はしりて狭山とはいわず。

続古今　秋風になひく狭山の葛かつらくるしき心恨かねつゝ

千　載　五月やみ狭山か峯にともす火は雲のたへまに星かとそみん

かくよみしも此所なるへし、堯恵法師の記行に弥陀と云所にまかりて武蔵野をわけ野辺のほとりに名にきこへし狭山有。朝の霜をふみてゆくにわつか成山のすそにかたち計りの池有。

氷いし汀のかれ野をふみ分けゆくは狭山の池の朝風

是によりて見ればまさにちかひなし、名高き名所を誰しる者もなく其跡をうしのふ事も悲敷にあらすや。

大片貝。　井佐沼村　此所に長さ壹里程、幅半里計の沼有。其内に一つの浮島有て薬師佛を鎮座せり。

---

[1] 大ではなく犬

此沼の内に大片貝住凡大さ二三間程のよし。世俗に洪水の時はかの貝此嶋をせおふて水上に浮むといへり。年久敷住しにや今は此沼のぬしとなれり。

大蓮寺火。二ノ関田の中に有　幽成塚有。年々夏より秋かけて夜毎に大きさ壹尺計の火の玉飛出空中を迷ひ行讐をなすにあらねは人民さしておそれず。近郷を飛廻り暁方は本の古塚に帰る。抑昔此所に大蓮寺と云山伏有。いかなる迷なるらん、死て後一念の魂魄霊火となれり。近頃はとこしなひに成て人音のする方には自然と来頼る事也。世に此類多し。

豊後の不知火。津国の二恨坊の火　虎宮の火皆此類也。河内に姥火と云有。いつの頃哉。旅人此火に逢、飛来りて面前に落、俯て密にみれは鳥のことくにして嘴を叩音有。忽去て遠くみれはまとかなる火の玉也。まつたく是鵁也大蓮寺火も此類ひにても有哉。

星精の火は天の陽火。金木の火は地の陽火。霊火は人の陽火也。龍火雷火は天の陰火。石油の火は地の陰火。相火下火は人の陰火也。狐鼬鵁螢蛛の火は連俳にして火にあらず。寒火陽焔金銀精気の火は陰火にして物を焚す石灰桐油麦糖馬鳥の糞より出る火は陽火にして物をやく。雷火は陰火なれとも物をやく是陰中の陽也。信州浅間肥州阿蘇山奥州燒山乃火は砂石をやく是また陰中の陽火也。

岩井堂。井草村落合　此堂ひとゝせ洪水に堂舎ながれ此所の本尊浅草川へなかれ濱成武成が網にかゝり給ふ浅草観音是也。其堂の升形なかれととまる所升形村と云。

野火留。野火留村川越分江戸への道　倩此所をかく名付事昔業平女をかたらひ隠れけるを道来る人此野は盗人なん有とて火を付るに。

物語　武蔵野はけふはなやきそ若草の妻もこもれり我もこもれり、

かくよみ給ひしより其火此所にてとゝまりけるよりの名とや。

鬼鹿毛松。野火留村　いにしへ小栗判官手飼の鬼鹿毛此所に来り果しを所の者其印とて小松を植しか枝葉さかへて今は落々たる太夫松となれり。傍に観音の像を建り。思ふに小栗の廟は相州藤沢清浄光寺に有。いかなるわけにて鬼鹿毛此所に来りし哉いふかしき事也。

柏原城跡。柏原村　此所と城跡と云事上杉の城共云。又新田義興の城とも云。義興此所に在城といへる事いまた旧記に不見。鎌倉へ出陣の志し有し時陣屋にても有し哉。上杉の陣屋也とも云せつ有。北條小田原より柏原へ出張せし跡か。上杉憲政古河公方晴氏砂窪まて出陣して関東勢を催し給ふ事は北條の書にも見へたり。柏原城と云事旧記に見えすおほつかなし。

上戸城跡。上戸村　昔川越の城地のよし。天神縁記にもあり。世人みないふ事也。上戸の城といへる事いつれの書にも見えず。思ふに上戸村鯨井村と隣にて一所の地也。今上戸の城跡といへるは旧記に

鯨井の城成へし。鯨井の城は北條家持国の時宮城美作守宣好居之、御領国となり。戸田左門一西在城す。其後廃城となり。此城に有竹木の類みな川越に寄たりと云。此言を以て世俗に城を移せりと云成るへし。

松山城跡。比企郡　此城は北条家持国の時上田安樂斎正景在城御領国と成て松平内膳正家広居之、其後廃城になれり。今に大手惣堀の跡櫓馬場歴然として其儘有。永禄五年氏康此所を責し時の籏塚とて所々に其跡残れり。外曲輪と覚しき所岩山に洞のことき穴凡百計も有へし。いか様合戦の時分此穴に宿りしもの哉。世俗には上代火の雨降し時掘し穴成と云伝へし事也。

新河岸櫛山　大塚右近桜　岸村梅屋舗　的場村狼塚

高島九十橋　大仙波猿坂　杉下姥ヶ池　中台駒留原

荒宿雀ヶ森　杉下柳馬場　武蔵野木宮地蔵　野田下亀甲塚

懐古来歴不詳其目録而已記し大尾とす。